序にかえて

女子栄養大学における教員生活を振り返って

女子栄養大学教授
生化学研究室　山　田　和　彦

私は，平成21（2009）年４月に徳久幸子先生の後任教員として生化学研究室に着任しました。埼京線・川越線・東上線を利用した通勤時の電車の車窓から，麦刈り，田植え，稲刈りなど凡そ14回ほど眺めながら，どのように講義を行おうか，実験実習を進めようか，遅刻しないか，あるいは図書館から借りた新書に読み耽ったりして過ごしてきました。多くの先人から教えられたように，①一生懸命に仕事を行う，②故郷や出身を大切にする，③自分を主張しつつ共調の方向を模索する，④若い人の考えを大切にする，⑤調査研究の水準を高く維持する，⑥難しいことを分かり易く説明する，ということに努力してきたつもりです。失敗も数多く仕出かしてきました。

平成21年当初の講義授業においては，学生が理解していないかもしれない表情に対して何とも対応できず落ち込みました。図表を印刷したものを配布し，決して奇麗とは言えない文字で板書しながら後ろを向くと，何人もの学生が下を向いていたことが思い出されます。一方，同じ頃，新型インフルエンザの流行が日本国内にも目立ち始め，中学や高校の修学旅行が中止され，慌ててマスクを買い込んだこともありました。平成22年秋には坂戸キャンパスにて日本栄養改善学会が開催されるための準備，また，この学年度まではA・B・C・Dの４クラスに分けての講義授業形式でしたので，どのクラスはどこまで終えたかを整理整頓することに苦労しました。そして，平成23年３月に東日本大震災があり，実践栄養学科４年生は管理栄養士国家試験を何とか終えたものの，学位記授与式は中止となり，引き続く計画停電の中，何かと不自由な生活であったと記憶しています。その後は，私にとって比較的順調な実験結果や調査結果を前にして，卒業研究生や大学院生との自由な会話を楽しむことができる学園生活を続けることができました。しかしながら，令和２（2020）年２月に新型コロナウィルス感染症（COVID19）が日本にも及び，学位記授与式，入学式のいずれもが中止され，通勤・通学も制限となり，情報技術を駆使した遠隔授業が開始されました。正に青天の霹靂であり，遠隔授業のための一からの図表の作成ならびに技術学修の試練続きです。

生化学研究室では，小腸に存在する炭水化物の消化酵素についての実験研究と，包装食品への栄養強調表示ならびに健康表示に関する国内・国外の文献的調査研究を指導してきました。卒業研究生あるいは大学院修士課程の学生には，先人の発表論文の読解が重要なこと，語学力の向上を目指すこと，さらには実験方法や自分の出した結果への内省ならびに拘りを持つこと，再現性を維持することを伝えてきました。学会等で発表する時には，例えば100人が前にいると98人はあまり理解してもらえないかもしれないが，２人は必ず理解してもらえるものです。一方，安易に自分の考えを98人には押し付けることができても，２人にはそうはいかないものです。このことを忘れないようにと。これも私自身が教わったことです。

世界は発展を続け，人的交流・混合も今以上に進むものと思います。健康増進をめざした「栄養」という概念と実践もこれまで以上に増すであろうということを，女子栄養大学での教員生活の中で具体的に身近に感じるようになりました。ここにお世話になりました教職員の皆様，大学院生，学生の皆様に感謝申し上げます。